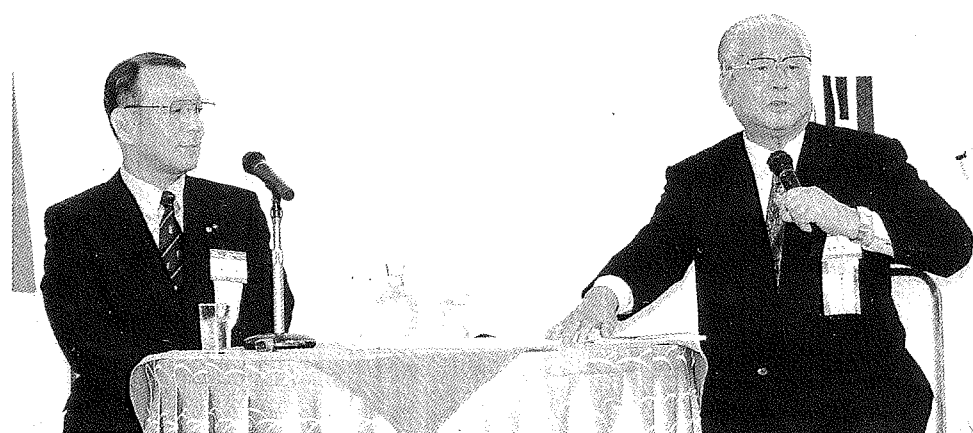


テーマ 「ロータリーの夢を語ろう」



中島 治一郎 氏

九里 茂三 氏

略 歴

生年月日：1935年6月19日  
 現住所：大阪府泉大津市松之浜町2-24-3  
 TEL 0725-22-2277  
 所属クラブ：泉大津ロータリークラブ  
 現職：泉大津ケーブルテレビ株式会社  
 代表取締役社長

学 歴

米国ニューヨーク市 コロンビア大学

職 歴

ナカボ株式会社 代表取締役会長  
 中島毛糸紡績株式会社 代表取締役社長  
 泉大津商工会議所会頭・大阪府技術協会理事  
 帝塚山学院理事

ロータリー歴

1961年：泉大津ロータリークラブ入会  
 1982年～83年：泉大津ロータリークラブ会長  
 1986年～87年：R.I.2640地区ガバナー  
 1988年／90年：国際協議会グループ ディスカッション・リーダー  
 1992年～95年：ロータリー財団管理委員会委員  
 1995年～96年：国際ポリオ・プラス委員会委員  
 1996年～97年：R.I.指導者養成検討委員会委員  
 1997年～98年：R.I.職業奉仕委員会委員  
 1997年～02年：国際ポリオ・プラス委員会委員  
 1998年～00年：ポリオ・プラス広報部メンバー  
 1999年～00年：R.I.人口増加並びに経済開発問題委員会委員

略 歴

生年月日：1921年2月6日  
 現住所：山形県米沢市門東町三丁目3-11  
 TEL 0238-23-2854  
 所属クラブ：米沢ロータリークラブ  
 現職：学校法人九里学園  
 理事長・学園長

学 歴

1940年3月：山形県師範学校本科卒業  
 1944年9月：東京高等師範学校卒業  
 1944年10月：海軍予備学生  
 1944年9月：秋田青年師範学校教授  
 1944年12月：海軍兵学校教官  
 1945年9月：米沢興譲館高等学校教諭  
 1957年4月：学校法人九里学園理事長  
 1961年4月：米沢女子高等学校校長  
 1979年4月：九里幼稚園園長

ロータリー歴

1965年：米沢ロータリークラブ入会  
 1968年：米沢ロータリークラブ幹事  
 1970年：米沢ロータリークラブ会長  
 1976年：R.I.353地区（当時幹事）  
 1986年～87年：253地区ガバナー  
 2800地区パストガバナー

同期のガバナーの対談

九里 ちゃんと決まっているものですから、たいへんに私は下手な司会役で申し訳ないんですけど、実は中島さんは私と同期なんです。1986～7年の同期のガバナーなんです。ご覧の通りその後たいへんなR.I.の各パートの委員等でご活躍になっていらっしゃるわけで、あれから13年、彼はぐんぐんとロータリーのお仕事を、しかも本質的に狙いを定めてというか、生きていらっしゃるわけで、私なんかはその後ぼんやりとして皆さんにたてまつられたばかりで、本当にうとくなってしまう男なんですけど、しかし今日こういうチャンスを与えていただいて本当にありがたう思います。ロータリーの夢を語れという。私は中島さんに「夢なんてとんでもない話だ。今俺は絶望の中にいる」。この日本の現状を見ると、特に青少年の問題なんか、くやしくてくやしくてどうにもならないわけなんですけど、しかしガバナーもそう言い、また誰もがそう言ってらっしゃるように、この年から来年、まさに100年を総括して新しい100年に向けてすばらしい構想を持って進まなくてはいけないターニングポイントだから、やっぱりだめだとしても、そのだめは何がだめだったのか、なぜだめだったのか、そしてそいつを救う道は何だということをやったり考える責任があるわけで、中島さんにそのへんを話していただこうと思って出てまいったわけです。前置きはそれくらいにさせていただいて、私はやっぱり中島さんになるべくたくさん語っていただきたいと思います。ちょっと前に少し打ち合せじみたお互いのディスカッションをしたんですが、私はやっぱり今のR.I.会長が言っているように、ここでロータリーの原点というものをもういっぺん考えてみようじゃないか。そしてそこからいったいロータリーはどんなふうにならなかったのか良くなったのか、そのへんを問題にしてみようじゃないかという話をまず申し上げたんですが、よろしいですか、そんなことでどうぞ。

中島 皆さんこんにちは。藤川ガバナーから過分なご紹介をいただきまして恐縮いたしております。

す。2800地区の地区大会に寄せていただきまして、会長や幹事の皆様方とお話できますことを本当にうれしく思うわけでございます。私がうれしく思うというときは、本当にうれしく思っているわけでございまして、これはもし皆さん方の中でたとえお一人でも私たち二人の話から感銘を受けられたり感動されたりして、明日からのロータリーのために何かプラスになることのお手伝いができれば無上の喜びでございます。私は25歳のときにロータリーに入りました。1961年でございます。もう40年弱、ロータリーをやっているわけでございます。私にとりましてこのロータリーというのは、人間道と申しますか、ロータリー道だと思っております。山形の方は武士道ということにずいぶん惚れ込んでおられる方が多いと思いますが、その道と一緒にあります。私はロータリー道だというふうにして、その道をできたらきわめたいと思って今日までやってまいりました。そんな中で、一人でもたくさん感動を共に分かち合っただけを歩んでくださる方が出れば、それ以上の喜びはないわけでございまして、そういうことで喜びだというふうに言っているわけでございます。ロータリーの原点というのは、いま九里先生がおっしゃいました。この原点の最初、1905年にポールハリスが始めた頃の原点もあれば、ポールハリスというのはいろいろな方と語り合っただけをいっしょに導入していきましたから、どこに原点がありますかと申したら、私にとりましては1923年にできました決議の23-34というのが、これは金R.I.会長代理さんも今回の地区大会のご本の中でご挨拶に述べておられますが、これが原点ではないかと私は思っているわけでありませう。

決議 23-34が 原点

この決議23-34が決議されますまでの18年間に、いろんな議論があって、ポールハリスもいろんな方からの示唆を与えられて、そしてそれに達した非常に密度の濃い、ロータリーはどうあるべきか、私たちの人生はどうあるべきかというようなことを皆で一生懸命語り合った末に集大成としてでき

あがったのがこの決議だというふうにも思っているわけであり、金R.I.会長代理さんもおっしゃっていらっしゃいますが、これが私達ロータリーの哲学になります。私達ロータリアンが人生を歩むべき人生の哲学であります。唯一ロータリーが人生の哲学であると述べているのは、私はこの決議のみだと思っております。私にとりまして人間道、ロータリー道といっているのはこの哲学をたどって私の人生を生きていきたいというふうな若い時分に思ひまして今日に至ったわけでございます。私の夢は、このロータリークラブの有り様、ロータリーの有り様がその哲学にのっとってその地域地域で輝ける存在になってたくさんの方の尊敬を集められるようなロータリークラブの存在になってもらいたい。もしくは、世界中のロータリークラブがだめなら、まず日本のロータリークラブがそういうふうなロータリーという人生の道場におきまして、お互いが切磋琢磨して人作りをする。どんな人かともうしましたら、思いやりに満ちた地域社会を少しでも住みよいところになりたいと願う熱意にあふれた人たちがたくさんできる人作りであります。そういう人作りをする道場がロータリークラブであり、ロータリークラブの週1回の例会だというふうにも思っております。ところが、現実には私はずいぶんたくさんの方を訪ねることがございますが、今申しますようなそういった道場的な修練をする場としての例会を持ってもらえるクラブは非常に少ない。皆さん方のクラブにおきまして、私が今申しておりますようなクラブの例会、クラブの有り様になっているかと申しましたら、自信を持って手を挙げていただける方は少ないのではないかと申します。これは山形だけではなしに、日本国中どこへまいりまして、私のクラブを含めましてそこに至っておられない。だから私の夢なのでございます。だけど、これは私は決して不可能ではない。皆がそういうふうな念じれば、必ずその域に達しうる可能な夢だと思っているわけであり、そしてその道場では、剣道の道場では道具は竹刀であります、この私たちの人作りの道場では道具は何かと申しましたら、私は「奉仕」だと思っております。奉仕することに

よって磨いていく。そしてそのお互いのクラブの同志たちに人間的にいろいろ触れ合う中で学ぶことができる。先輩から、人間としての人格、志の高い方々から多くを学ぶこともできる。そういう道場であってほしいと願うわけであり、日本では、各地域におきましてこういう道場の存在が不可欠になってきていると思っております。私は今ロータリーの出番ではないかと思っております。しかし、出番なら出番なりに、出番に応じて出られるような存在でなくてはならない。それにはやはり、私たちお互いが人間を磨き合わなければならぬ。そうして自分の背中で自分の職域の皆さん方、地域社会の皆さん方、たくさんの方々、自分の子供や孫はもちろんのことでありますが、背中でいろいろ教えられるような人間にまず自分なる努力が必要ではないかと思っております。

今ロータリアンの数が減ってきております。先程金R.I.会長代理さんからも報告がございましたように、世界中でその傾向がございます。日本もここ2年前にいたりましてようやく減りだしたわけであり、これは、結局ロータリーにいても面白くないとか、学ぶことがないとか、存在価値がないとか、連れがやめたから一緒にやめようとか、そういうような方々がおやめになっているわけであり、私は今日のこのように熱心にご出席くださっている皆さん方は、そういう傍観者としてではなく、ロータリーを存在価値のあるものにすべき主催者として、ぜひ一つ一生懸命考え、そして私たちのこの話もお聞きいただきまして、何かを得ていただき、そして私の夢、それぞれのクラブがその地域社会におきまして自分たちを磨く道場、先輩からいろんなものを学ぶ道場としてその地域の方々から尊敬の眼で見られるきらりと光る存在になって下さるような方向に少しでも進んでいくならば、望外の喜びだと思っております。従いまして、九里先生のご質問でございます私にとりましてのロータリーの原点というのは、決議23-34。これはご存じのない方もあるかもしれませんが、手続き要覧の社会奉仕のページを開いていただきますとその冒頭に書いてございます。素晴らしいことがたくさん書いてある。ま

ず最初にそうやって「人生の哲学である」というふうにも述べてあるわけでございます。ぜひ一つ、まだ決議23-34を親しく読んでおられない方は、学習をしていただきたいと心から望む次第であります。

九里 ありがとうございます。つまりロータリーの真髄は、決議23-34に示された、つまり利己と利他との調和だと。つまり自分のためにいろいろと金儲けもしたい。そういう欲望、利己ですよ。それと、しかし自分が幸せになつて人様も幸せでなければ幸せとは言えないという実感がある、何とかして人様のためになろうと、こういうことだと私は理解するんですが、それでよろしいですか？ 私はポール・ハリスの最初の頃のことを少し考えてみたいと思うんですが、彼はたいへんにロータリーを考える一番の原点になったのは、あのシカゴの中で弁護士として誰一人知っている人間がなくて、寂しかった。彼はたぶんなぜロータリーを考えたのか。寂しかったからだと申したということなんですね。さて今、日本で、本当にシカゴのその頃の状況と今の日本の状況というのは、何か似ているような気がしてならないんですね。皆自分のこと、自分のことで、本当に人を蹴落としても自分さえ良ければいいんだといったような、ミーイズムと言うんでしょうか。これが充満しきっている。一つ眺めてみても、一方で家庭が本当にお互いそれぞれ持ち分を考えながら協力し合っているいい家庭を作ろうとしているのか。奥さんは奥さんで旦那さんは旦那さんで、息子は息子で、どうも私は昔から見ると非常にばらばらに自分勝手な発想みたいなものがぐんぐんふくらんできているんじゃないかと考えたりします。結論としては、社会の連帯というんでしょうか。これが影が薄くなってしまっている。お互いがお互いのためとか、例えば鶴岡なら鶴岡のためとか、庄内のためとか、あるいはもっと広い意味で世の中のためというふうな発想がどんどん減ってきているんじゃないかという気がするので、やっぱりロータリーがそういう現実にはっきりと目を向けて、それを解決するためにお互いに本当に腹を打ち明けて話し合いながら、そ

の地域のために、あるいは人のために何かをしていこうと、今、中島さんは奉仕とおっしゃったけれども、世の中のためという発想を、ここで何とかロータリアンがきっちり意識して復活できない



九里 茂三氏

ものなのだろうかというふうにも、私はずっと思い続けてきたんですね。教育の問題に少し入っていただきたい。先ほどはもうすでにそういう話を申し上げたんですけども、青少年が、私から言わせると大人が奇妙なことばかりして奇妙な社会にいるものだから、子供たちはもうどこに行っているかわからなくなっているんじゃないかと、そんな気がしてならないんですね。それを子供のせいだとは、私は決して言えないと思うんです。もちろんその他にも、この情報社会と言われるような本当に我々の手に負えないような、情報がぼんぼん彼らを変な方向にひっぱっていつているということもありましょうし、あるいは豊かな社会で、本当に何でも手に入る。何でも思いがかなう。そういう状況の中では奮発心なんていうものがなかなか生まれてこないということもありましょうし、私は本当にこうして一生教育者として生きたんだけれども、こちらへんで本当に、どうすれば子供たちに充実感を与えられるかといったことで悩んでいるわけなんです、中島さんそのへんのことを少しご意見をいただきたいと思うんですが。

### 泉大津商工会議所の試み

中島 私は九里先生とは同期のガバナーなのでございますけれども、年は14歳離れております。この地域での教育界の名士でございますので、ロータリーがなければこの方の前で対談なんておよそおぼつかないのでございますけれども、ロータリーのおかげでこうして二人で対談させていただいているわけでございます。しかも、非常に高いレベルにおられる教育界の方に、青少年の育成

について話をするのは非常におこがましいのですが、実は私は去年の10月から私どもの町の商工会議所の会頭を承っております、私が会頭に就任してすぐに教育文化振興委員会というのを作りました。そうしますと、商工会議所の連中から「商工課会議所と教育や文化とどんな関係があるのや、そんな委員会いらん」という反発を受けまして、私は「とんでもない。教育・文化の振興ほど大切なことはない。今の若年層の教育、そして彼らに精神的な豊かさをわかしてもらえぬ努力をしないと、彼らは明日の経営者であり明日の消費者であり、そういう方々を健全に育成する努力をしないでどうして商工会議所が成り立つか」と反発いたしました、自分の意見を押し通しました。そして、学校をずいぶん回しまして、特に中学校はずいぶん荒れた中学校もございました。それを、学校を回りますまでは全然知らなかったのでございます。しかし、もっと地域社会に関心を持って自分で知る努力をしようと思ひまして学校を回りましたら、中にはひどい中学がございます。校長先生に案内してもらいましたら、校長先生の案内にも関わらず、授業中に抜け出して廊下で遊んでいる子、ひどいのは運動場に出て野球をやっている子、授業放棄しているわけがあります。「ひどいですね」と校長先生に申しましたら「いや、これは良くなった方です。ついこの間までは机の上で暴れる子がおりましてなかなか授業ができなかったんですが、今は彼らがない。連中は静かに勉強できます」ということでもございました。これはずいぶん大変なことだと思ひました。小学校も今、高学年はそれに近い状態になりつつあるようであります。私は山形県は知りません。山形県の教育のお偉いさんの前で想像するのもいけないと思ひますが、しかし、中学や小学校によっては大阪とそう変わらない現象もあるのではないかと思ひます。これは、大変なことでもございます。

今やろうとしておりますことは、これは校長先生方からのご依頼もございしますが、学生たちに商業や工業の会社、商店へ預かっていただいて、経営者からいろんな人生のお話をいただく。そして、

世の中そう単純には回っていない、いろんな苦勞もあるんだということを学生にわからせる努力をしたいとおっしゃいました。これはもう商工会議所はお手のものでございますから、すぐ手配をいたしまして、今年の11月26日から預かることにいたしました。他に何かと申しましたら、北海道の稚内ではよさこい踊りを導入することによって、非常に荒れた中学が甦った。それは、荒れた子供というのは非常にエネルギーである。将来非常に頼もしい子が荒れている。そのはげ口が悪い方に出るだけで、そのエネルギーのはげ口を健全な方に向けてやると、おとなしい子よりもずっと良い子になることは請合いだと思ひ先生方がおられて、そして北大の方の紹介でよさこい踊りを導入なさって、その荒れた子供たちがよさこいに魅入られて練習をした。やってみると非常に楽しい。今年よさこいが終わるともう来年の企画を一生懸命始めるものだから、そんなワルをしている間がないということで、ずいぶんそれが好循環をいたしまして、今その稚内の南中学校でございましたか、非常にいい学校になっているそうであります。そのドキュメンタリーの映画がございまして、それをぜひ見せてほしいということでもございました。さっそく借りてまいりまして、先生方や父兄の方にお見せしました。ずいぶん感動を覚えられたようであります。そういうことで、できることはいくらでもある。やらないだけで済んでしまっていることはたくさんある。これは、どうしてそのように悪い方にエネルギーを放出してしまうか、先生方の話を聞きましても生徒と話しましても、どうもそういう連中には心の中に規範がない。良い悪い、フェアであるフェアでない、そういうことを見極める自分の心の中の規範がないものだから、問い掛けることができない。それで、考えることなしにやってしまうし反省する術もないということではないかと感じたわけでもあります。その子供たちの親を見ましても、親の心の中にも規範がない。これはぜひ九里先生におうかがいしたいのであります、どうしてそういうふうに、親の年代、今30、40の年代の方々の心から規範が消えてしまったのか、その方たちの教育にももう

すでに問題があったというふうに思ひます。この子供たちの心に規範をきちっと植え付ける責任が、その社会にある。社会教育を通じてか家庭教育を通じてかその双方か、学校教育も共に、私は子供たちにきちとした規範を与える責任があると思ひます。その一助として、商店や工業会者に預かって子供たちにいろんな話を聞かせるのはいいことだと思ひ実践に踏み切ったのですが、そういうふうに規範を子供たちに与える、私は親に与えるのは遅すぎると思ひますから、子供たちに働き掛ける以外手はないと思ひますが、この努力は必要ではないか。これはぜひ一つ学校でもおやりいただきたいし、私が考えますのに、これはロータリーが一番向いているんじゃないかなと思ひます。先程申しましたロータリークラブの例会で道場的な存在になって、そこで切磋琢磨して磨き合った人格を高めたロータリアンが、自分の背中で自分の地域社会の人たちにいろんなことを学んでいただく努力が必要じゃないか。そして、子供たちがその背中から学んでくれればいいし、少なくともいろんな手立てを講じて、やがては親になる子供たちにとりあえず心に規範を持っていただく努力をすべきです。

私は泉大津市の市政を見ておりまして、市ではちょっとできないと思ひますし、ロータリーが最適ではないかと思ひているわけでもあります。そういうふうにロータリーの出番はこれ以外にもたくさんございます。また時間がありましたらお話し上げたいと思ひますが、そういう出番に応じられるような状態にまずロータリーがなるべく努力をすべきだと思ひているわけでもあります。そういうことで、私は子供の心に規範がない、むしろそれを育てる、背中を見せる親にも規範がないということに一番問題があるのではないかと思ひます。

九里 どうも、だんだんこっちへ返ってきたようです。こういう年になりますと昔ばかり懐かしくて大変に失礼な言い分になるんですけど、やっぱり自分たちの少年時代のことを考えてみる。本心に曲がったことは許さないという大変に強い親父ですね。私の親父がそうだったんですが、また

今度は隣近所の方が、皆我々子供たちの行動を見守ってくれていて、ときには叱りとばし、ときにはほめてご褒美をくれたりといったようなことで、家庭に一つの権威がきちんとしてあったし、その地域社会に同じような価値観を持ったそういう大人たちがおって、子供のやることを見守ってくれていたということをおぼえられますね。私の年代になりますと戦争時代の話になりますけれども、日本がああいう形でぐんぐん戦争に突入していったわけですが、しかしやっぱり規範とあなたがおっしゃるから規範だったのかな。やっぱり大東亜を救うんだといったような、そういうスローガンが日本にあって、そして盟主としてアジアのために働かなくてはならんといったような論理がきちんとしてあって、結果的には戦争というばかげたことをしてしまったわけだけれども、しかし我々の少年時代にはやっぱり非常に明確な国の方向付けというのか目標があったと思ひますね。それをそのまま復活する気はないわけで、新しい時代の規範というものを、やはりここで大人たちが共通に意識しなければならないのではないかと思ひます。

## 「礼」と「譲」

少し今度は私に自慢話をさせていただきたいんですが、私が校長になって、私立学校ですからねやっぱり教育の一つのスローガンというのか、私はこういう教育をしますという、そういう明確なアピールというのか、これをしなければ私学ではないというふうに考えて、それこそ先生方と一年近くディスカッション、いろんな形で重ねていて、結論として礼儀の「礼」ですね。それから譲という字、「譲」ですね。その二つの言葉を考えたんです。その譲というのは、米沢に興譲館という学校があって、それは譲に興るといふ昔の言葉があるんですが、それはへり下るといふ意味だったんですね。私は二宮尊徳の思想などを少し研究しておったものですから、譲という言葉をもっと積極的な意味にとり、サービス、他人に対するサービスととった。つまり自分の持っている力を他人に及ぼしていくという譲だというふう

に考えて、そういうスローガンを立てたんです。そうしたら先生方も生徒も、少し古めかしい言葉なものだからわからないというので、礼には人間の尊厳を信じ、その高貴さにふさわしい行為をしよう自分が本当にいかにも尊い人間として高まっていかなければならない。人も皆そういう存在なんだというふうに考えていくと、当然そこには言葉遣いであれ態度動作であれ、我々が昔考えた礼儀がそこに生まれてくるわけですね。あるいは思いやりが出てくるわけですね。「譲」は、あなた方が勉強するのは何の目的なのか。もちろん自分の生計を立てていく一つの手段としているんな知識や技術をマスターするのは大事である。併しそれだけだったら人生誠に寂しいじゃないか。自分の能力を何か世の役に立つように使ってみて、初めてそこで生きている喜びが出てくるんじゃないかと考えて、「自らの持てる力を発揮して愛する世の人々に捧げよう」、こういうふう考えたんですね。それを立てて、5年後にいろいろ検討させたんですけれども、先生方は、まさにそれは我々教師自身を含めて一つの人生哲学だというふうに納得して、その言葉を変えずにずっときたわけです。今度は朝のホームルームでその言葉を唱和しよう。私が命令したわけじゃないんだけど、先生方がそう考えて、朝ホームルームになるとまず、その唱和を始める。「礼、人間の尊厳を信じ、その高貴さにふさわしく行為し、譲、自らの持てる力を発揮して、愛する世の人々に捧げよう。」古めかしい言葉だけでも、新しい時代の一つの生きる規範だというふうに考えていました。たまたま私はその頃からロータリアンになったんです。ロータリアンをいろいろ勉強してみると、私が言っている礼と譲と、似ているんじゃないかと考えたわけです。あなたが、ロータリーは人生道場だとおっしゃったんですが、結局人間として高まっていく、本質的に高まっていこう、そういう発想。しかも人のためになることによって、自分の喜びを作りあげ。譲。同じだなあと考えたんですね。そうしたら、ちょうど私がガバナーになったときに地区大会をやって、その話を申し上げたんです。結局行動のところに礼と譲というの

が書いてあって、私が書いたんだけど、さっきの言葉が書いてあった。そうしたら、それをロータリアンがみつけて、一生懸命書いていってくださいましたね。だと思ったら今度は、クラブに参上したら、私の書いたその字が、実は子供たちに書いてあげたことがあったんですが、それが例会場に掲げてある。うれしかった、これは荒砥です。白鷹クラブです。私は考えたんです。結局子供たちに我々が一生懸命教えようとしているその発想を、社会の人も共有してくれば、これほど強いものはないと考えた。

浜田 2800地区パストガバナー浜田でございます。うちの方の和田会長は、英語が非常に堪能な方なんです。ですからそれを聞いた九里学院インターアクトの生徒が、会長に聞かせたいということで、マイボランテニアということで英語で演説をなさったんです。それを会長に聞かせたいという。私はそれを聞いて実に感動しました。表情も豊かだし、発音も非常に立派だったんです。それからもう1つ感動したのは、鈴木さんとおっしゃる女生徒、一年生です。この方のお父さんは海外青年協力隊、そしてお母さんはタンザニアの方なんです。いわばハーフで日本国籍はありますけれどもみるからにそういう国の方じゃないかなと思われるような方なんです。その方の日本語の演説がありまして、お母さんが「山は動かないけれども人間は動くんだ」と、だから人間どうして話し合えば何でも通じるということをお話になりました。それを聞いて、ロータリアンは涙ぐみました。それほど九里先生の学校は礼と譲で立派な教育をなさっておられるとつくづく感動いたしました。ありがとうございました。

### 例会で切磋琢磨を

九里 何か学校の宣伝になっちゃった。しかし、先程中島さんと話をして、本当に規範がありますと、子供たちはやっぱりその気になる。私はそういうことを幼稚園のお母さん方にも語って聞かせているんですけど、やっぱり親を変えなくてはならない。あるいは地域社会の人々を変えなくてはならない。そのインパクトを与えられるのは、

ロータリアンじゃないのか。私は2600地区、加賀に行ったときにそういう話をしたんですけど、やっぱりロータリアンは少なくともオーナーだ。そうすると、相当の人数の職員を持っているわけですね。だから、あなた方はそういう職員たちに対して、家庭の問題だとかあるいは属する社会の問題だとか、そういったことについていろいろと語って聞かせたり、この人が今おっしゃったロータリアンは背中を見せるようなそういう存在なんだと、それをぜひやってほしいという話をしてきたんですけど、少し自慢話になってしまって申し訳ない。

中島 皆様方もご存じの通りに、最近一流の経済人の中から不祥事が起こりまして、たくさんの方がロータリアンであります。従いまして、この背中を見せる背中の持ち主自身が、あまりいい背中を見せられないロータリアンも多いわけです。今九里先生がおっしゃいました、自分の職場におきましていろんないい親であるべき話をする、そういう機会は多いと思いますが、そういうお話ができて、同じ仕事の仲間に感動を与えられるだけのロータリアンがどれだけいるかと言いますと、私は非常に寂しく思わざるを得ないと思うのであります。従いまして私は、ロータリーの例会においてお互いが切磋琢磨して、磨き合う必要があるのではないかと思うのであります。今タンザニアの方のお話を伺いましたが、これはインターアクトのことであります。他にもロータリーはたくさんいいプログラムを持っております。青少年交換、これなんかもすばらしいプログラムだと思います。私どもの地区では、インドと今青少年交換をやっております。インドへ派遣いたしました高校生女の子が帰ってまいりまして、帰国報告をいたしました。インドにまいりまして、非常に苦勞をいたしました。本当に汚い国です。預かっていただいた家庭もそこそこの家庭だが、非常に日本の基準でいえば環境とか食べるものそのものにしても非常に汚い思いがして、最初はいたたまれなかった。しかし、一年を経て帰ってきた今、非常にあそこにやっていただいたことに感謝している。例えば物質的な豊かさでいったらインドと日

本は比べものにならない。しかし、インドの子供たちの目を見ると輝いている。ところが日本へ帰ってきて同年輩の子供の顔を見ると、目が輝いていない。その違いを発見しただけ



中島 治一郎氏

でも私はインドにいた一年間に感謝をしたいというふうに報告したのであります。私は感動いたしました。これだけのものを与えられるプログラムを私たちは持っているのであります。他にも小学生を出すとか、GSEとか、いろんなプログラムがございます。そんなことで、できるだけ若い方たちに外国を見せる努力をするのも一つの手だと思います。人間の幸せというのは、やはり自分が体験いたしました一番どん底から比べまして、今はありがたいと思えるわけでごさいます。そういう体験を自分ができなかったら、他の苦勞しておられる方々の状態を見せるというのも一つの手でごさいます。加えまして、先程申しましたように、一人一人のロータリアンがその地域社会にあって、その地域社会の出来事に関心を大いにお持ちいただきまして、その関心を持った出来事を少しでも強化していくには何ができるかということをお考えいただきたい。私はロータリーで、ロータリー道を一生懸命学んできたつもりであります。そういう、ある程度精神の有り様を変えていただいて、そして商工会議所の会頭をさせていただいて、商工会議所の会頭としてロータリーで学んだことを実践するチャンスを与えられたわけであります。私はロータリーのクラブの中で何かをやるということだけでなしに、ロータリーで修業を積み、高められた精神力で、その社会もしくは自分の職業の中で、そして国際的なお付き合いの中で、きらっと光る存在になる努力、そういう存在がこれから私は非常に必要だと思うのであります。特に、地域社会でこれからの青少年の育成にあたりまして、そういう存在がロータリアンの中に出てまいりまし

て、その点が線になり、ロータリークラブの中だけでなしにそれが面になっていくと、地域社会は非常にすばらしいものになっていくのではないかと夢見ているわけであります。ぜひ一つ、お帰りになりましたら、クラブの皆さん方にそういったことを共に考える機会をお持ちいただきたい。それが私は道場になる初めだと思うのであります。例会でそういうことを語り合う。奉仕の機会を語り合う。よそで聞いてきたい話を語り合う。そして何かを生み出す努力をしてみる。そして気付けばそれは行動に起こす必要があると思います。先程申しました23-34も、ロータリーは実践の世界であります。いいこと言っているだけではだめ、思いやりがあるだけではだめ、思いやったことを実践することが必要であるというふうに説いているわけで、私はその通りだと思います。ぜひ一つ、先程九里先生がおっしゃったような話の中から何かプラスになることを汲み取っていただきまして、お帰りになりましたらそれを話題にしてクラブの皆さん方と語り合ってください。あまりにも私は日本の社会というのは語り合いが少ないと思います。商工会議所におきまして、何か会合をやりましたら、それは何でも通ってしまう。議論がほとんどないというような状態が多くございます。私はこれは、非常に一見仲を保つのにいいかもしれませんが、そこから何も生み出せない、生産がないわけであります。大いにこれからの日本というのは激論を戦わせて、その激論の中から敵意を生み出すのではなく、一番最高の結論を得る努力をすべきだと思うのであります。

### 青少年交換、財団留学生など

九里 今青少年交換とか、あるいは財団の留学生についてロータリーがいいことをしている。私も日本という社会が、今までは貧しくて本当にはい上がってきた国だと。しかしそういうときに、さっきあなたが、インドの子の目が輝いているという。やっぱり我々も輝いたはずなんですね。そうするとこれから子供たちの目を輝かせるテーマは何だということになるだろうと思うんです。私はやっぱり豊かさの分かち合いというのか、アジ

アを見たばかりでも、大変にまだまだ貧しいメンバーがやたらといるわけですね。あなたがポリオをいろいろ苦心してくださった中でも、やっぱりアジアが非常に多いわけでしょう。そうすると、自分たちは幸せで豊かなんだけど、もっともっとひどい方々がこのアジアにたくさんいるんだというそういう認識を、できるだけ実感させたい。これはいろいろな情報、映画であるとかそういったものもたくさんありましようし、そういうことに我々はかかずらってみた方がいいんじゃないかという気がしてならないんです。今持ってきた「開発途上国との触合い」というので、昔私が扱った生徒の作文なんですけれど、母親と一緒にフィリピンに行った。フィリピンに行ったら、ある腰の曲がったようなおばあちゃんが背中に大きな籠を背負ってあるところでその籠を下ろした。見たら、エビの頭ばかりだというんです。これは何に使うのかと思っておばあちゃんに聞いた。そしたら、本当に憎々しげにその娘たちを見て、「エビの身は日本のスーパーにあるでしょう」と言ったという。そう言われてこの娘は大変ショックを受けるわけです。書いてある文章の中に「泥棒」と書いてある。日本人はいろいろお金をちらつかせてそうしたものをやたらと買い取ったんだけど、彼女は買い取ったと考えない。泥棒という。低開発国から泥棒しているというふうに認識するわけです。この文章を読んで、私は生徒にも読んで聞かせたんですけど、「あなた方はあまり幸せすぎるんだ。やっぱりもっともつよその国のことを知ろう」。うちの宣伝をする気はないんだけど、ずいぶんあちこち生徒を派遣しまして、帰ってくる。今ここに私の方の幹事さん、牧野君もいます。牧野君の娘もそうでしたね。帰ってきてみると、やっぱり違うんですよ。そういう子供が、クラスの中でいろんな話をする。そうすると、やっぱり大変な影響力がある。今タンザニアの娘さんが学校に来ているんだけど、やっぱりそういう子供のいろんな言葉や仕草、あるいは生活状況などを見て、子供たちは大変に感じるところがあるんですね。だから私は、子供は決してだめなんじゃないんだと、与えようによっては本当に光る

目を持っているんだという認識ですね。私はやっぱりそういう意味で夢を託したい。大人のやり用一つで子供は変わっていくんだといういわば確信をもたなければならないだろうと思いますね。そんなことが私なりのロータリーの夢です。相当時間を取ってしまったんですが、もう一つ中島さんに聞きたいと思ったことは、ちょうど1985年から、ポリオプラス、私たちがガバナーになった前の前の年ですか、そういう提唱がありまして、2005年までに世界中からポリオをなくするという運動をはじめたわけですが、20年になるプランですよ。中島さんは日本のそういうパートの代表として、いろんな活躍をなさってきたんで、そのことをぜひお聞きしたいと申し上げていたので、その方を一つお願いします。

### ポリオ・プラスは今一息

中島 ポリオのことを皆さん方にお話する機会を与えていただいて非常にうれしく思います。九里先生がおっしゃいましたように、1985~6年度からポリオの運動が始まりました。2000年までにポリオを撲滅して、5年間発生しないのを見極めて、2005年の私どもの100周年記念に、皆でその喜びを分かち合おうというのが、私たちの狙いでございます。この100周年記念事業というのをぜひ強く頭に置いていただいて、クラブの会員の皆様方にもお話いただきたいと思うのであります。だいたいロータリーというのは多年度のプロジェクトを今までは回避してきたのであります。今年のラビッツァ会長さんは持続ということをおっしゃって、3年間くらいのプロジェクトを選択しないと、今時代は変わって1年で済んでしまうようなプロジェクトはあまり皆さんに感動をよぶようなものは少ないとおっしゃっておられまして、私はその通りだと思います。しかし、ポリオはこれで15年目に入るわけでありまして、ずいぶん長いプロジェクトでございます。確かにマンネリズムで感動を与える機会が少なくなっているかもしれませんが、しかしながら、これは私どもの100周年記念事業であります。皆さんの方のクラブにおきまして、5年きざみで周年事業をやっておら

れます。5周年であろうが10周年であろうがね何か市に贈ったりして意義のある周年記念を持つということ、だいぶ前から企画されて実行しておられるわけであります。私たち100万を超える会員を擁します国際ロータリーの100周年事業でございますから、これはやはりかなり意義のあることをやりたいというふうに会員全員が願ったわけであります。あれは何も理事会が決めたことではございませんで、ロータリアンの中から沸き上がってきた声が集約されたわけであります。そして、ポリオを世の中から撲滅しようという願いになったわけであります。ワクチン代金を1億2000万ドル集めようというのが最初の目標でございましたが、その倍も、2年間で集まってしまいました。それで進んできたわけでありまして、実際やってみると、子供の数も思ったより増えますし、ワクチン代も上がりますからなかなか最初の目標額ではうまくいかないわけであります。しかし、1991年、日本の場合は1992年の6月までにワクチン代は皆さん方から集めるが、それ以後はもう達成したから集めないという勝利宣言をやってしまったわけであります。この勝利宣言というのは、ワクチン代が集まったという勝利宣言でありまして、ポリオがなくなったという勝利宣言ではなかったわけでありまして、ずいぶんたくさんの方が誤解をなさいまして、ポリオは終わったと思っておられる方が多いのでございます。しかしまだ決して終わってはおりません。もともと1年間に50万人くらいの犠牲者が出ておりましたポリオは、今は昨年の場合6000件まで報告例が減っております。今調査網が非常に発達しまして、毎回患者がですとすぐ調べに参れますから、その報告例の背景にある数というのは減ってまいりました。

昔は報告例のだいたい10倍の患者がいると言われてたものでございますが、今はせいぜい3、4倍であろうと。2万5000ぐらいの患者に減ってきたのではないかと去年は言われておりました。今年に入りまして激減しております。それは、調査網が、サーベイランスと呼んでおりますが、より徹底してきた。インドなんかはもうポケットゾーンがたくさんありましてよくわからないところがあ

りましたが、またワクチンの一斉投与も歯抜けのところがありました。最近では徹底してやるようになってまいりました。今年に入って激減したようになっております。私は明日からエバーストにまいりまして、国際ポリオプラス委員会にでするので、最新の情報はそこで出ますから、また藤川ガバナーのところへファックスを送らせていただきますが、激減しているそうです。2000年中にゼロにするのは無理かもしれません。しかし、WHOは望みはあると言っております。私はどうも、長年ポリオに携わってまいりまして、実感として2000年中にゼロになるとは思えないのでありますが、遅くとも2001年いっぱいか2002年のあたりにはゼロにできるのではないかというフィーリングを持っております。そして、その後2005年までの間に発生しないことを確かめて、やはり私どもの100年記念事業の完成を2005年のシカゴでの世界大会で皆さんと共に喜びを分かち合いたいと思っているわけでありませう。

インドも一斉投与の数を増やしまして、年末と年始と2回やっておりましたが、今4回やるようになりました。徹底して一斉投与でゼロにしようという努力をしているわけでありませう。アフリカも内戦なんかが続いて一斉投与がなかなかできませんでしたが、WHOの努力で停戦なんかをうまく引き出して、そういう国でも一斉投与が可能になりました。アフリカもゼロにむかって進んでおります。そういうことで、皆さん方、ぜひワクチンの一斉投与が可能になるような、ポリオプラスパートナーズプログラムと呼んでおりますが、ポリオがゼロになる日が1日でも早くなりますようにご協力を賜りたいと思うのでありませう。私はバングラデシュとかインドとかネパールとか中国の一斉投与に参加いたしました。先程九里先生がおっしゃいましたように、非常に悲惨な状態でありませう。これは日本の子供に皆に見せてやりたい。あの状態を知ったら文句は言えなくなる。苦情は言えなくなる。自分たちがいかに幸せか一目でわかってくれると思うのですが、そうはいっていないわけでありませう。

バングラデシュなんかは、食べられない、学べ

ない他に、井戸を掘れば悪い毒素が入っているというので、飲料水にも困っております。これは全国に渡って非常に困った状態にありませう。そんなことで、貧しているのをまた追い打ちをかけて飲料水まで毒されているような状態で、気の毒でたまらないわけでありませう。そういうことで、少なくともポリオ、あの忌まわしい病気をゼロにして、これに成功いたしますと、今先進国でもワクチンの投与をやっておりますから、約それに1500億円ぐらい、15億ドル今金を使っておりますから、毎年1500億円お金が浮くわけでありませう。これは私は大きな事業だと思ひませう。今皆さん方から投資をしていただいて、年間1500億円の利益をあげるのと一緒の事業でございませう。有望な事業として、ぜひ一つ投資をしていただきたいと、心から念じる次第でございませう。

できうるならば、皆さん方もぜひ一斉投与にご参加いただいて、単にポリオ撲滅運動に参加したという意識を高めてもらうだけでなしに、その国の現状を見ていただきまして、いかに彼らの生活が大変なことかということ、若い世代の方たちに自分の口で伝えていただく。そういう感動も味わっていただきたいと思ひませう。

九里 ありがとうございます。我々のささやかなお金が世界のポリオをなくすということに参加できるということで大変喜んでいませう。2005年までと思ひていたのが、2001、2年でなくなりそうだとおっしゃる。大変にうれしい話でございませう。

安孫子 久しぶりで、23-24を原点とする考え方をお聞きし、また今日はR.I.会長代理の金鍾大さんからもそういう話を聞きまして、大変良かったなと思ひませう。中島先生の話にもありました通り、例会がロータリーの本質的なものから少し離れつつあるということが一番心配なことだろうと思ひませう。やはり青少年問題もそうだけれども、地域社会を管理していくという面、いわゆる改善していくという面は、そこからスタートしないとだめなんだろうと思ひませう。しかし、今までの国際ロータリーのロータリークラブへの指導という面から見ますと、その点が非常

に弱い部分だと思ひしております。どうしてもロータリーというのは会員拡大とか、あるいはWCSとか世界奉仕的な部分に力を入れている傾向なものですから、どうしてもそういう方向に走ってしまうと、いわゆる例会の重要性がどこかにいってしまふんですね。そのへんのところをもう少し見なおして、今年のラビッツァ会長は少しそのへんの重要性を主張しておられますけれども、やはり私がロータリーに入って30数年になりますけれども、ずっと反省……意外と少なかったというのが実感なのでございませう。従って、R.I.にもその指導の面で考えていただきたいということなんです。そこらへんが一つだと私は思ひしております。それともう一つ、こういう席で言っているのか悪いのかちょっと気になるんですが、公式に出ている話でございませう。藤川ガバナーが国際協議会に行つてこられた中で、その講演集の中にこういう言葉があるんです。ロータリー財団の理事ですからどなたが話をなさつたのかちょっと記憶にありませんけれども、たぶんダクターマンかどなたかだつたと思ひませう。けど、「ロータリー財団なくしてロータリーなし」という言葉があるんです。たぶんご存じだと思ひませう。けど、そういう言葉が財団の中で話し合われているのかどうか、ちょっと気になったものですから、そのへんの中島さんの感じをお聞きしたいと思ひたんです。

中島 国際協議会のときに財団の管理員をまだしておられた会長代理がいらっしゃるんで、会長代理にお話願つたらいいかと思ひませう。会長の代理で来ておられるので間違つたことを言つたら大変なことだと思ひませう。私の方でとらせていただきます。まず最初の例会のありように関しまして、私はR.I.の職業奉仕員とか、指導者養成検討委員会とかの委員をいたしました。そんな中で、例会の充実を図ることの大切さを諄諄と説きました。しかしこれをわかってくれる人は非常に少ない。それが今の現状だと思ひませう。また金R.I.会長さんにそういったこともうかがいたいと思ひませう。私は非常にじれったい思ひをしております。これはむしろ日本から範を示さないといけなないんじゃないかというのが私の先程披露

した夢でありませう。日本のクラブが例会を充実させて、そこで皆さん方が切磋琢磨されて人格向上を図られ、きらりとその社会で光る存在にロータリークラブがなつてきたときに、そしてロータリアンが非常に内容の濃い活動をなさつて、世の中が少しでも住みよくなる方向でご努力いただけましたら、彼らは「ああ、そのことか」とわかってくれると思ひませう。これは僕は日本で範を垂れる以外ないんじゃないかと。R.I.サイドがだめだからもうロータリーはだめだということ言うのは簡単でありませう。しかし、だめだからここで日本がリーダーシップを取つて範を垂れようという思ひの方に変えた方がいいんじゃないかと私は思ひしております。ロータリー財団のことに関しましては、ロータリー財団の委員でそんなことを思ひている人は誰もありません。国際ロータリーのロータリー財団でありませう。ロータリーの一部でありませう。しかしながら気概としては、ロータリーの中でロータリー財団が非常に有用なプログラムをいろいろ用意して、ロータリアンの皆さん方に奉仕の機会をさしあげる。そして皆さん方に有用なご奉仕をしていただく、そのために一生懸命知恵を使つてがんばらねばならない。いいプログラムを提供したい。そして皆さん方からの浄財をできるだけ有効に使えるように努力すべきだと思ひませう。そういう非常に熱い思ひを持っておりませうから、少し口がすべりますとそういう表現になるかもしれませんが、決してそういうことは思ひしておりませう。一人もおられませう。いかがですか。

## 価値観・優先順位など

九里 いいご質問をありがとうございます。他に何かありますか。ロータリーの夢を語ろうということなんです。やはり急に何かができるわけではないわけで、ちょうど2000年というターニングポイントをきっちり意識して、今までの自分たちの例会や、あるいはクラブの運営や、これでよかったのかということを考え直してみるチャンスにさせていただきたいと思ひませう。一つだけ私が気になっているのは、親睦という、確かに酒を飲んだりご馳走を食べたりするのはいいこと



ロータリーの夢実現のために今為すべき使命と役割は…

なんですけれど、それと親睦が同じだみたいな発想だと困るんですね。さっきも中島さんと話したんですが、フェローシップ、親睦、お互いにその地域のメンバーとして共通の意識を持って何かをしようと考えれば、当然そこにチームワークが生まれる。同じ仲間だという意識が生まれる。その仲間作りが親睦だとそう考えていいんですね。私はまさにそのことを今の日本のロータリーにも言いたいわけです。日本人というのはどうも恵まれすぎているというのか、そのくせ我々の属する社会とかその地域は本当に良くなっているのかというと、必ずしもそうでないわけですね。やっぱりアメリカの連中が、いろんな人種が寄り集まって自分たちでいい社会を作るんだというそういう意識に燃えたそういう考え方、今日本ではもう一回考え直してみる必要があるという気がするんですね。よけいなことを申し上げました。ガバナー、これくらいでよろしいでしょうか。

中島 先程の規範の話でございますけど、私は20歳のときにアメリカにまいりまして、ボストンカレッジというところで1年とコロンビアで3年勉強したのですが、まいりましたときのカルチャショックのことを話させていただきたいと思うんです。まいりまして、私は20歳の日本人としては比較的いろいろ深くものを考え、人を説得する力もあるという錯覚を起こしておりまして、アメリカに行ったんです。同年輩の青年に会いまして大きな差を見せ付けられました。これはもう追いつかないなど。これは本当に向こうは大人でこっちは子供だと思ったのであります。それはどうい

うことかと申しますと、アメリカの連中というのは、選択肢を10与えますと、優先順位をきちっと短時間でつけられる。これが一番、二番、三番。そしてなぜそれが一番でなぜそれが二番で、なぜ一番優先順位の後に回らねばならないかという背景の説明も的確にできるわけでありまして。これは私はとてもできませんでした。私はその40年以上前から比べまして、差はますます開いていると思うのであります。私は規範と申しましたが、アメリカの子供たちというのは親からそういう価値観を受け継いで心の中にきちっとした規範を持っている。その規範に照らして優先順位をつけることができる。そういうふうになっているわけでありまして。これはやはり青少年にそういうチャンスを与えませんか、差がいくらでも開いてしまう。この狭くなりました地球で、今はグローバルにいろんなことを競わなければなりません。商売にしても政治にしても。そういつたときに日本から出ております選手は必ず欧米の連中に負ける。特にアメリカの連中には負けてしまうと思います。説得することはできないと思うのであります。それくらい力があいてしまっている。そこで何ができるか。子供たちに、そういうふうに分の力で立つ力を与える。自分の頭で考える力を与える。今は野球一つみましても解説者がついて、すべて解説付きであります。自分で考えようとしなさい。子供たちに考える力を与える努力も、私はロータリアンに必要なのではないかと思います。クラブにおきましては、ディベート、白と黒に分かれまして自分が白を主張したいと思っても黒側に立つような例のディベートであります。ディベート方式で子供たちに討論する機会を与えているクラブがございます。私は、こういったことも一つ具体的な青少年の指導方法だと思うのであります。自分の地域社会の子供たちをよく関心を持って眺めていただきまして、この子供たちに力を付けてやるにはどうすればいいか。これは学校教育だけでも無理だし、社会教育もしくは家庭教育の中で、総合的に子供たちに本当に力を付ける、自分たちの頭で考えて、できれば事の善悪をちゃんと見極めて優先順位をきちっと付けられる子供たち、そ

して大人に育てていただきたい。今は大人でも、なかなか日本人の中には優先順位を付けられない人がたくさんあります。これは本当に私は小さくなった世界で問題だと思うのであります。ロータリーがそれこそ出番である。子供たちに優先順位をきちっと付けられる規範を心に与えてあげる。そういうチャンスをさしあげられるのはロータリアンしかないんじゃないかと思うのであります。私たちは4つのテストを持っております。私は25歳のとき、入ったときから「4つのテスト」の信奉者であります。実際私はあれを使っています。ずいぶん私の役に立ったと思っています。あれ以上規範は必要ないんじゃないかと思いません。真実かどうか、フェアかどうか、あれは非常に大事なことだと思います。フェアとは何かということの子供たちにきちっと教え込む。これは親の仕事でございますが、これを怠っておりますから、私どもロータリアンが代わりにそれをどうすればできるかということを考えて実践をしていただきたいと希望します。先程九里先生がおっしゃいましたように、私どもの大切な決議、23-34の精神は自分のことだけを考えるのではなく、他人様の幸せも共に考える。そういう利己と利他の調和が私どもの哲学であります。この導入も然りであります。今まで親たちは子供に、「自分の幸せだけ考える。他の人を蹴飛ばしてでもいい学校に入れ」と教えてきたわけです。これは利己であります。しかしこれからはそうはまいりません。もうそんな、いい学校に入っていい職業に就けばずっと幸せという安全なエスカレーターはありません。グローバルな戦いの中で実力を発揮できる子供を育てることが大事だと思います。時代はすっかり変わってしまいました。そういう自分の子供をよくみつめて潜在能力を引き出してやって、そこを伸ばすということを考える親を増やさなければなりません。そして自分のことだけを考えたらだめだよという教育をしてくれる親を増やさねばなりません。親への教育はもう少しかもしれませんね子供にそういうことをぜひ教えられよう機会を作っていただきたい。実践していただきたいと思うわけでありまして。私は民主主義

の熟度も日本は足りないと思っていますからその話もしたかったんですが、それに私はロータリーが今呼ばれていると思います。出番だと思います。出番がありますからおおいに利用していただき、ロータリーの存在価値を高めていただく。そうすれば私は会員候補なんて門前市をなすと思います。自分のロータリークラブの会員の数が減るのを心配するのではなく、たくさんの方がロータリーに尊敬をもたれて、あの会にはぜひ入りたいというようなロータリーでぜひありたい。それが私の夢でございます。

ぜひ一つ明日から、会員の皆様方とその方向でご努力いただければ、私がかこまで来まして口角泡を飛ばさせていただいたかがあるというものでございます。

九里 私の学校は男子を入れまして、米沢女子高等学校が、今度は九里学園高等学校にしました。それで新しい校歌を作れという。これは私がかまもなくこの世から去っていくには残すべきものは校歌に残ればいいなと思って書いたのです。

二、日の本の 若人われら  
我が持てる力と業を  
外つ国と競い交して  
あたらしき世を創り成す  
あゝこれぞ我等が希望

三、礼に立ち 譲に励みて  
もろ人と和らぎ睦む  
建学の訓えのまゝに  
世のゆくて高く照らさん  
あゝこれぞ我等が使命